八　マルクスと社会の更新

国家を社会に、それも変装した国家ではない「真の」社会に、できるだけ広い範囲にわたってとりかえること、これがいわゆるユートピア社会主義の目標であることをわれわれは知った。真の社会の前提は次のように約言することができよう。すなわちそれは内面的につながりのない個々人の集合ではありえない。なぜならばそのような集合は、やはりまたたんに「政治的」原理、すなわち支配と強制の原理によって結合を保ちうるにすぎないからである。真の社会は、共同体的な生活を基礎とする小社会と、これら小社会の連合体とから構成されなければならない。そして各小社会の成員相互の関係も小社会と連合体との間の関係も、ともにできるだけ広範囲に社会的原理、すなわち内面的つながり、協力および互助の原理によって規定されなければならない。いいかえれば、構造的に豊かな社会のみが国家の後を継ぐことができるであろう。このような目標は、その本質からして、支配秩序の変改すなわち権力手段を行使する権能を有する者をとりかえるだけでも、また所有秩序の変改すなわち生産手段を駆使する権能を有する人びとをとりかえるだけでも、なおまた社会生活の形態を外部から規制する法律や制度を変更

するだけでも、さらにこれらすべてをいっしょに行うことによっても達成されることはできない。これらすべては変革のある段階では必要とされるが、それはもちろん、真の社会の生成にとって基本的な、欠くことのできない自発性、内部からの形成、したがってまた多様性の諸要素を発生せしめないような、全体を統一的に規定するいかなる強制秩序もそれから生じないという条件の下においてのことである。しかし本質的に必要なことであり、しかも上にあげた諸契機はすべてこれをただ十分に補い、完全なものにするために役立たしめられなければならないほどに本質的なことは、まさに真の社会そのものの建設が、一部はすでに存在しながら形態と意義とを更新しつつある社会から、一部は新たに形成せらるべき社会からなされることである。外部的変革が起ったとき、このような社会がすでに存在しているか、あるいは計画されていればいるほど、変革された秩序において社会主義を実際に実現すること、すなわち政治的もしくは経済的形態のいずれかにおいてであれ、ないしは両者においてであれ、権力原理が再び侵入し、法律や制度の表面的な変更の下に、資本主義制度の下におけると同じように、人間的関係がねじまげられ、倒錯したままであるような危険を予防することが一層可能であろう。かの経済的および政治的秩序の変革は、社会主義実現のために欠くことのできない障碍の排除を意味しはするが、それ以下でもなければそれ以上でもない。経済的および政治的秩序の変革なしには、社会主義の実現は観念、刺戟、また孤立的実験たるにとどまる。しかし社会構造の実際

的更新なくしては、秩序の変革は母家のない間口でしかありえない。とはいえいかなる場合にも秩序の変革が時間的に先立ち、構造的更新はその後につづくものと見るべきではない。みずからを改革する社会は、おそらくそれを成就するためにまた防衛や障碍排除のために必要な機関をつくりだすことができるであろう。しかし変更された権力関係は、権力原理を克服しうるような新しい社会をつくりだしはしない。「ユートピア」社会主義は、種々の形態の協同組合をもって社会の構造的更新のために最も重要な細胞と見た。そしてその観念が明確になればなるほど社会更新のさいに指導的な機能をはたすのは完全な、生産と消費とを結合した協同組合であることがいよいよ明白なことと考えられている。「ユートピア」社会主義にとって協同組合は自己目的ではないし、そこで広範囲な社会主義の実現が達成されたときにもそうである。問題はむしろ新しい秩序によって解放され、その権利が確立され、多様なものの統一にまで結成せらるべき実質を建設することである。「ユートピア」社会主義はある特殊の意味で局地的(topische)社会主義とよぶことができる。それは「非地域的(オルトロース)」ではなく、むしろ時々に与えられた場所でまた与えられた条件の下に、したがってまさに「ここでいま」、ここでいま可能な限度において実現されるであろう。しかし局地的実現は、「ユートピア」社会主義にとっては出発点、「端緒」以外のものではなく、より大規模な実現が結びつくために存在しなければならないもの、この実現が自由と勢力を闘いとるために存在しなければならないもの、新しい

社会がそれからすなわちあらゆる細胞とそれら細胞に似た姿で成立しているものとから建設されるために存在しなければならないものでしかない。――そしてこのことは、この思想の発展につれていよいよ明らかになったのである。

ここでわれわれは、マルクスおよびマルクス主義にたいし、目標と方途とについての決定的な問をかけることにしよう。

マルクスは、社会主義にたいする最初の定式づけからその思想の十分な円熟にいたるまで、「ユートピア」社会主義にきわめて近い仕方でその目標を理解していた。一八四四年八月に早くも彼はこう書いた（論文「批判的評註」）。「革命一般――現存権力の倒壊と旧関係の解体――は政治的行動である。だが革命なしに社会主義を成就することはできない。社会主義は、破壊と解体とを必要とする限り、この政治的行動を必要とする。しかしその組織的活動が開始し、その目的自体、その魂が出現するときには、社会主義は政治の殻を投げすてる。」われわれはこれといっしょに、同じ年の初めの『ユダヤ人問題によせて』から引く次の文章を読まなければならない。「人間はその『固有の力』を社会的力として認識し組織するとき（したがってルソーが考えるように、人間の本性を変え、人間からその固有の力をとりさり、他の社会的性格の力を人間に与える必要はない）、またそれ故に、社会的力がもはや政治的力の形に分離しないとき（すなわち組織的な支配原理の領域としての国家をもはや確立しないとき）、そのときにはじ

めて人間の解放は達成されるのだ。」マルクスにとって政治的関係は、よく知られているように、その早い時代からすでに階級支配の表現および完成以外の何ものでもないことがきわめて明白であるから、それは当然に階級支配の廃止とともに廃止されなければならない。もはや「人々から、また共同体的存在から引きはなされない」人間は、まさにそれ故に政治的人間ではない。しかもこのことが、初めは革命後の発展の結果とは見られていない。むしろ、上の二つの文章に述べられているように、革命自体、すなわち純粋に否定的「解体的な」機能としての革命は、最終の政治的行動なのである。転覆によって準備された地盤の上に組織化の活動がはじまるやいなや、すなわち社会主義の積極的機能が働きを開始するやいなや、政治的原理は社会的原理にとって代えられる。社会主義の積極的機能が活動する領域は、もはや人間の人間にたいする政治的権力の領域ではない。弁証法の定式は、マルクスの見解によれば実際の出来事から何が継起するかについてなんら疑の余地を残さない。すなわち一方において社会革命の政治的行動は、たんに階級国家だけでなく、さらに権力組織としての国家一般を抹殺するが、これにたいして、政治革命はまさに国家をまず「一般公務として、すなわち真の国家として建設」する。他方においては組織化の活動すなわち社会の再建は、現存権力の完全な崩壊ののちに初めて開始する。――革命に先立って行われる組織化の活動といえば、闘争の組織でしかなかった。ここですでにわれわれは、マルクスを「ユートピア」社会主義に結びつけるところの

もの、すなわち政治的原理を社会的原理にとり代えようとする意志と、彼をそれから引きはなすところのもの、すなわちこのとり代えが専らに政治的な手段によって、したがっていわば政治的原理の純然たる自殺の方途においてなしとげられるとする見解とを、きわめて明瞭に見てとることができる。

この見解は、十五年後の『経済学批判』の序文で古典的定式化を見たような、マルクスの弁証法的歴史観に深く根ざしている。

ところがわれわれは、プルードンにたいする反駁書（『哲学の貧困』）の最後の章で、ささいなものではない制限に出会うのである。「労働者階級は」とそこでマルクスは述べている、「その発展の過程において、古いブルジョア社会を、階級とその敵対関係とを排除する結社にとりかえるであろう。そしてもはや本来の意味のいかなる政治権力も存在しないであろう。なぜなら政治権力はまさにブルジョア社会の内部における敵対関係の公的要約にほかならないからである。」「本来の意味のいかなる政治権力も存在しない」――ということは、階級支配の表現および完成の意味でのいかなる政治権力も存在しないことを意味し、これは階級支配の廃止が実際に行われた場合にはまったく自明のことである。われわれは、明らかにマルクスの視野には一度もはいらなかった問題、すなわちプロレタリアートが実際に「最後の」階級であり、それが支配を獲得するとともに階級支配一般が崩壊するかどうか、勝利をおさめたプロレタリアートのな

かに新らしい社会分化が、たとえ階級という名称は用いられないにしても、必ずや新らしい支配関係に導くかも知れないような社会分化が起らないかどうかという問題は、ここで度外視するとしよう。しかしそれにしてもなおそれに劣らず重要な、「本来的ではない意味の」政治権力、すなわちもはや階級支配には基づかない、そして階級支配廃止ののちも存続する政治権力の本質および範囲に関する問題が残っている。このような権力が階級支配に基づく権力に劣らず、それどころかより以上強くさえ感じられることがありえないであろうか。ことに「革命を防衛すること」が問題となっている間、すなわち事実上人類全体が階級支配を廃止してしまわない間は、あるいはおそらく、プロレタリアートが勝利をおさめた特定の国で支配的な社会主義の見解とその実現とが人類全体のものとなりおわらない間は、そうしたことがありえないであろうか。だがここでわれわれが最も関心するのは次の点、すなわちそのような一国もしくは数ケ国で一定の見解が支配し、しかも実際に現代のあらゆる技術的な権力手段を用いて支配している間は、社会主義の実現、社会主義的社会形態の成立に欠くことのできないかの自発性、かの自由な社会形態の探究と形成が、いかにして存在しうるであろうかという点である。本来的な意味の権力と非本来的な意味の権力との間にはっきりした境界線を引かなかったことによってマルクスは、彼の見解によれば存在しないし、また存在しえないところの政治的原理の一変種、すなわち階級支配の表現および完成ではなくて、むしろ階級によって特質づけられない

集団および個人の権力傾向や権力闘争の表現および完成であるところの変種に門戸を開いている。したがって非本来的な意味の政治権力はプロレタリア階級の内部、あるいはもっと正確には「階級支配が廃止された」全人口の内部における敵対関係の公的要約となるであろう。一八四八年の問題の多い革命からの印象は、構造的更新の企てにたいするマルクスの批判的態度をきびしくした。すでに『宣言』で「小さな、当然失敗に終る実験」が非難されたが、いまや（一八五〇年の『フランスにおける階級闘争』についての報告において）「ささたる手くだと大げさな感傷とによって、必然的な革命的階級闘争をさけようと夢想する」ところの「空論的社会主義」が糾弾され、さらにその後（一八五二年の『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』において）、フランスのプロレタリアートが一部「空論的実験や交換銀行や労働者組合」に没頭し、「かくしてその固有の大々的な手段のすべてをあげて旧世界を転覆することを放棄し、むしろ社会の背後で、私的な仕方で、その限られた条件のなかで、自己の救済をもちきたそうとする、したがって必然的に失敗すべき運動」に没頭することが非難された。

さしせまる革命へのマルクスの確信は、当時はまだ動揺していなかった。しかし言葉の十分な意味での間近な世界革命にたいする彼の期待はぐらつきはじめていた。一八五八年に彼はエンゲルスにこう書きおくった。「われわれにとって困難な問題というのは、大陸では革命が切迫しており、それはすぐに社会主義の性格をとるでしょうが、はるかに広大な地域でブルジョ

ア社会の動きが上に向いているときに、この小さな片隅（すなわちヨーロッパ大陸）での革命が必然的に粉砕されはしないだろうかという問題です。」この疑念はつづく年月とともにさらに強まったように見える。他方マルクスは、同じ年月の間に、革命を別にした政治闘争の意義をいよいよ強く感じるようになった。こうしたことは、さらに六年後に、とりわけ『国際労働者協会の創立演説』に影響をもたらした。彼はそこで、十時間労働を「原則の勝利」としてほめてから、協同組合運動の抬頭を「資本の経済学にたいする労働の経済学の一層大きな勝利」とよんでいる。この偉大な社会的実験の価値はいくら高く評価しても、高過ぎることはありえないであろう。なぜならば、いかなる援助も受けずに協同組合を設立した労働者たちは、賃銀労働が「結合された労働を前にして消滅すべき運命にある」ことを事実によって立証したからである。しかし協同組合制度は、大衆を解放するためには、「全国的規模への発展、したがって国家的手段による助成」を、それ故まさにルイ・ブランやラッサールが望みかつ努力したことを必要とする。しかしこうしたことは大土地所有や資本から進んで承認されはしないであろう。「だから」政権を獲得することが、いまや「労働者階級の大きな義務」である。ひとはこの、「だから」という言葉に十分注意しなければならない。労働者階級は、協同組合運動の途上から障碍物を一掃するために、議会において政権をかちとらなければならない。マルクスはここで協同組合、とくに生産協同組合に中心的な意義を与えている。なるほど、マルクスが起草し

た一八六六年ジュネーヴ大会の決議でも、協同組合運動はそれだけでは資本主義社会を改造しえないことが強調されている。しかし同時に、それは依然資本主義社会改造の本来的な方法として認められており、ただそれを完全に実行するためには、労働者階級による国家権力の獲得を欠きえないというのである。ここでマルクスは、原理的に受けいれているのではないけれども、実際には構造的更新の思想にいちじるしく接近している。これに関連して言及する価値があるのは彼がすでに、協同組合がありきたりのブルジョア株式社会に転落する危険をはっきり認め、またそれにたいする正しい救済、すなわちそこに働くすべての労働者が同等の分前を受けとるべきことをすすめている点である。

ところが、その決議を起草したジュネーヴ大会から三ケ月足らず前に、マルクスはエンゲルスにあて、インターナショナルの総務委員会における討論でフランス人たちが表明した傾向、すなわち「再び『連合』を形成するが、いかなる国家をも形成しないところの小さな『集団』または『コミューン』にすべてを分解するプルードン化されたシュティルナー主義」について書きおくっている。ここには、それとなくではあるが、マルクスの思想における国家的中央集権主義の底流がまぎれもなく表明されている。彼が攻撃するプルードンの連合主義は、決してすべてをコミューンに分解しようとするものではなく、むしろ現存のコミューンに比較的に広い範囲の自治を与え、それらコミューンをして連合体を結成せしめ、それら連合体の結合をもっ

て現在の国家よりも有機的な形態の自治共同体たらしめようというのである。これに反してマルクスはここでもまた国家そのものに固くしがみついている。

しかしそれからさらに五年ののち、ある革命的出来事、従前のいかなるものよりも強勢なまたその方向を異にした出来事すなわちパリ・コミューンが、マルクスの見解に再び影響をおよぼした。彼の最も重要な著書の一つである、フランスの内乱についての、インターナショナル総務委員会の宣言（『フランスの内乱』）で、マルクスはコミューンの発生、活動および目標を叙述した。この叙述の歴史的信頼性については論議されているが、しかしそれはいまわれわれの関知するところではない。この叙述は一つの告白であり、しかも新しい社会の生成にたいするマルクスの態度の変化というわれわれの主題にとって最も重要な告白である。

コミューンがマルクスの眼にとって従前のあらゆる企図から区別されるところのもの、「その真の秘密」は、それが「本質的に労働者階級の政府」であったことである。これは文字通りに理解すべきである。すなわちマルクスはたんに労働者階級によって任命されるだけでなく、さらに実際に労働者階級によって執行される政府を考えている。コミューンは、「生産者の自治」である。普通選挙によってパリ市民のなかから選ばれ、選挙民の一定の指図に拘束され、いつでも解任されるメンバーをもって構成されるこの代表団体は、「議会的な団体ではなく、同時に行政府でもあり立法府でもある行動的な団体たるべきであった。」同一の組織形態が、フ

ランスの最小の村落にいたるまでのすべての自治体に用意された。地方自治体は地方議会において共同業務を処理し、地方議会はその代議員を全国代議員会におくるわけであった。かくして絶対王制の時代に由来し、「その遍在的機関をもつ」ところの中央集権的国家権力に代って広範囲に分権化された自治共同体が出現するわけであった。「そのときになお中央政府に残されている少数の、しかし重要な諸機能はコミューンの厳重に責任を負う官公吏に移されるわけであった。」しかし分権化はいかなる分裂化でもなく、むしろ有機的な基礎における全国的統一の再建であり、社会的な国民の力の、したがって全国民有機体の再活性化を意味したであろう。「コミューン制度は、社会に寄食し、社会の自由な活動を阻害する『国家』という寄生的無用物が、これまで食いつくしてきたすべての力を社会の体に返したであろう。このただ一つの行為によって、それはフランスの再生を開始させたであろう。」マルクスがここで語っているのは、一定の歴史的な国家形態ではなくて国家一般についてであることは明白である。地方自治が「自明的なもの」となることによって、国家権力は「無用なものにされる」のである。このことについて、「ユートピア」社会主義のうち誰一人としてこれ以上徹底的な見解を表明していない。

しかしコミューンの政治的構造は、マルクスにとっては、たんに本来的かつ決定的な事柄、すなわちもしもコミューンが絶滅されなかったならば、その傾向および計画からして不可避的

に到達したにちがいない大々的な社会転換への序曲たるにすぎない。彼はコミューンのうちに「そこで労働の経済的解放が達成されうるところの、究極的に発見された政治形態」を認めている。コミューンは「生産手段、土地および資本を自由な結合された労働のたんなる用具に変えることによって、個人的所有を一つの真実たらしめようと欲した。」しかもこの結合された労働とは、生産協同組合において結合された労働のことであった。「協同組合生産が」とマルクスは叫んでいる、「空虚な見せかけと妄想にとどまらないならば、それが資本主義制度を排除するならば、また協同組合全体が共同の計画にしたがって全国の生産を規制し、同時に生産を自己の管理の下にとりいれるならば――それは、紳士諸君、共産主義、『可能な』共産主義でなくて何であろうか。」つまり、共産主義の「不可能性」という一般の見解に反対して、それを可能なものとして立証するのである。したがって、コミューンおよび協同組合の連合主義――これこそはまさに彼が描くところのものである――がマルクスに真の共産主義として認められているわけである。なるほど彼はいまも「ユートピア主義」には顔をそむけている。労働者階級は「国民決議によって導入すべきいかなる固定的なユートピアをもたない。」労働者階級が新しい自治共同体と新しい社会にまで築きあげようとするコミューンおよび協同組合の制度は、考案され作成されるのではない。労働者階級は、新旧両世代の結合の現実、国民共同体自身のうちに漸次に成立する現実、そしてこの現実からのみその事業、その住居を建設することができる。

「労働者階級は実現すべきいかなる理想をもたない。彼らはただ、崩壊しつつあるブルジョア社会の胎内にすでに発展した新しい社会の諸要素を解放すればよい。」ここでわれわれは、一八四七年のあの「発展」という考えに出会うのである。しかしこんどは全く明白な、疑問の余地のない革命前の過程、しかも人びとの共同生活と共同労働との小さな、連合することの可能な単位すなわちコミューンおよび協同組合の形成をもって本質とする過程の意味においてであり、これにたいして革命の任務はただこれら単位を解放し、結合し、また権能を与えることである。たしかにこれは、十二年前の『経済学批判』における有名な定式、すなわち「旧社会自体の胎内でその物質的存在条件が孵化される前には」決して古い生産関係に代って新しいより高度の生産関係は現われないとする定式に全く合致している。ところが総務委員会の宣言では、パリ・コミューンは、この孵化がまだ完了していなかったために、失敗したというようなことはなんら暗示されていない。そして崩壊しつつある旧社会の胎内に発展した「新しい社会の諸要素」の主なものは、まさしくフランスで「ユートピア」社会主義の影響の下に建設されたかの協同組合なのである。――このことは、マルクスが描いたコミューンの政治的連合主義がプルードンの影響の下に形成されたことと軌を一にする。これら協同組合こそは、『共産党宣言』で「小さな、当然失敗に終る実験」とされたものであった。ところが、もしもコミューンが勝利をおさめたなら――しかも総務委員会の宣言全体は、あれこれの特定の事情がなかったな

ら、コミューンは勝利をおさめえたであろうことを示している――そのときにはこれら協同組合は新しい社会の細胞の実質となったであろう。

エンゲルスの次のような言明（一八七三年の）は、この点から、すなわちマルクス主義的革命政略から理解すべきである。「もしも自治主義者たちが、将来の社会組織は生産関係によって不可避的につくり出される限界のうちにおいてのみ権力を認めるであろう、といって満足したならば、われわれは彼らに同意することができたであろう。」あたかもプルードンが、すでに可能な分散化と依然必要な集中化との間の境界線を時々に引くことの必要をくりかえし説かなかったかのようだ！　別の折（一八七四年）にもエンゲルスは、（バクーニン派の活動を調査するため、一八七二年のハーグ大会で設けられた委員会の報告でのマルクスによる定式づけに緊密にしたがって）こういっている。国家、およびそれとともに政治的強権が、将来の社会革命の結果として消滅するであろうとすることには、すべての社会主義者が一致しているのに、「反強権主義者」たちは不当にも、「政治的国家を生み出した社会関係が廃止される前に、政治的国家を一撃で廃止すること」を要求した。「彼らは」とエンゲルスはつづける、「社会革命の最初の行動が強権の廃止であるべきことを要求している。」だが実際には思慮ある反強権的社会主義者の何人も、革命が強権の肥大とその過剰を除去することをもって口火を切り、その後では時々の与えられた事情に応じて強権を縮少すること以外には何も要求しなかったのであ

る。エンゲルスは彼のいわゆる挑戦に答えていっている。「紳士諸君、諸君はいつか革命を見たことがありますか。革命こそはおよそ最も強権的な事柄なんですよ。」それは、もし革命闘争自体が目的を意識した指導と厳格な訓練の下に行われなければならないことを意味するのであるならば、もちろん疑をはさむ余地はない。だがもしも、いつ終るかもわからない革命期を通じてすべての人びとが、思想および生活のあらゆる領域にわたって中央の強権的意志に無制限に規定されるべきことを意味するのであるならば、かくの如き段階から、どのようにして社会主義に進む途が通ずるのかは不可解である。

コミューンに関する著作から四年後にマルクスは、ゴータ合同大会のために作成された綱領草案をはげしく批判した手紙で、ラッサール派綱領の一主要点を問題とし、それによって彼らとの妥協の土台をとり去ろうという明らかな政治的意図をもって、協同組合にたいする彼の疑念を改めて表明した。たしかにここでマルクスは、「国家補助による協同組合の設立」に反対するにとどまり、協同組合生産が社会主義を目標として成立することを認めてはいるけれども、ビューシェの綱領についての「特殊な奇蹟的療法」とか、「宗派活動」とか、さらに「反動的労働者」とかの表現から見て、その意とするところは十分明らかである。しかしそれにもかかわらず国家補助による生産組合に関する条項は大会で採択された。

内部的社会改造とその前提条件との問題にたいするマルクスの賛否両極的な態度について、

われわれに他の何にもまして深く見抜かせてくれるのは、ヴェラ・ザスリッチ（ロシアの婦人革命家一八五一―一九一九年）との一八八一年の往復書簡である。（邦訳はマル・エン全集第十九巻収録）

したがってリヤザノフによるこの文書の公刊はとくに貴重である。というのは、マルクスの返信からわれわれは、一部はきわめて詳細な彼の草稿を知ることができるからである。公刊された草稿は、数知れぬ抹消や修正や補足を加えて九百行以上におよんでいるのに、書簡は約四十行である。

「偉大な使命をおびた偉大な時機の婦人」とステプニアーク（ロシアの革命運動家一八五二―一八九五年）がよんだヴェラ・ザスリッチは、ジュネーヴからマルクスに手紙を書き、その第一巻がロシアで「非常な評判を博し」、またとくに農業問題およびロシアの村落共同体に関する論議に重要な役割をはたした『資本論』の著者としてのマルクスに、村落共同体の将来の展望についての考えをたずねた。それはロシアの社会主義政党にとって「死活の問題」にかかわり、また革命的社会主義者たちの個人的運命もそれにかかっていると彼女はいった。それというのは、次のことが問題だったからである。すなわち村落共同体は、ただ政府の過重な租税公課や勝手なとり扱いから解放されるならば、社会主義の方向に発展すること、すなわち物資の生産および分配を漸次に集団的基礎の上に組織することができるか。それができる場合には、革命的社会主義者は「村落共同体の解放と発展にその全力をつくさなければならないであろう。」それとも――マルクスを拠り

どころとし、マルクス主義者と称するもっと多くの人びとが主張するように――村落共同体は「古代的形態」として歴史により、また科学的社会主義によって消滅を運命づけられているのか、その場合には、何十年経てば土地がロシア農民の手からブルジョアジーの手に移るのか、また何世紀でロシアの資本主義が西ヨーロッパで到達したのと同じ程度の発達段階に達するであろうか、をいたずらに計算している社会主義者たちは、「村落共同体解体の結果、賃銀を求めて大都市の街頭に投げだされる」農民大衆によって、たえず増大する都市労働者のなかで宣伝することだけに限らなければならないであろう。問題はロシアで社会主義の活動にたいする確信が次の世代に存在しうるかどうかを決定することにほかならないことが知られよう。高度資本主義の発達につれて「古代的な」共同体形態は必然的に解体し、なお遠い先の工業化時代のために都市プロレタリアートの階級意識的中核を準備すること以外に選択の余地のない西ヨーロッパの途をロシアもたどらなければならないのか。これに反してもしもロシアに、その特殊の農業制度に基づき、一般の史的弁証法からいわばはずれた特殊の途、共同所有と共同体生産との伝統的制度に社会主義の精神を吹きこむという途が存在するならば、またこの制度を内部的に発達させ、なお外部的にもよりよい状態をかちとることによって、革命のなかで成長し、いわば革命にまで成熟し、そして革命によってただ解放され、完全な自由と十分な権利とが確立され、新しい社会の脊骨を構成すべき有機的な社会的現実を形成することができるならば、そ

のときには、おそらくいくばくもなくして社会主義の実現にいたることのできる大きな、そして直接的建設的な革命的課題が存在することになる。これら二つの途のいずれが歴史的真理であるかの決定がマルクスの手にゆだねられたのである。

正しい解答を与えようとするマルクスの努力は、驚嘆に値するほど徹底的でありかつ良心的である。彼は以前にもこの困難な問題にたずさわったが、いままた改めて、しかも特別熱心にこれに没頭した。彼がきわめて精緻かつ正確な定式を抹消してはさらに一層適切な定式を求めていることがくりかえし見られる。この文書は、一連の断片的な草稿にすぎないけれども、ロシアの村落共同体の問題を綜合的に把握するためになされた最も重要な試みであるように私には思われる。村落共同体は、歴史資料の不足のため、いまもなお十分には明らかにされていない民族社会学の一章であり、またロシアの村落共同体は、その発達についての資料づけがきわめて欠けているため、とくに困難な一節をなしている。マルクスは、当時広く行われていた科学上の見解にしたがって、その起源をかなり早期のものと見る方に傾いていた。今日ではどちらかといえばそれを後の時代の、国家の財政政策の結果として出現したものと見なすのが常である。しかし最終の結論はたしかにまだくだされていない。こんごの研究によって、マルクスは、いま多くの人びとが考えるほど誤ってはいないこと、また財政政策にしてもなんら新しい社会形態を創造したのではなく、むしろ古いものを利用したにすぎなかったことが、（今日い

くつかの重要な研究が指摘しているように）立証されるであろうと思われる。しかしここではわれわれは、歴史的問題ではなく、マルクスが見たような、村落共同体の社会主義的展望についての問題をあつかうことに限らなければならない。

マルクスは、人類学者モーガンの言葉に関連づけながら、資本主義の現在の危機は、現代社会が共同体所有および生産という古代的形態のより高度の形態に復帰すること、すなわち共産主義的形態への移行とともに終るであろうと説明している。この「古代的」という言葉に驚くにはあたらない。期待するこの方向にこそ、ロシア村落共同体の大きな機会が存するからである。それは同じタイプの本来の古代的な共同体にたいして大きな長所をもっている。すなわちヨーロッパではそれだけが広い全国的規模において維持されてきたのである。したがってそれは、西ヨーロッパの共同所有の運命がそうであったように、社会進歩とともに消滅するとは限らないであろう。むしろそれは「その原始的特徴から漸次に脱却し、全国的規模における集団的生産の要素としてそのまま発展する」ことができるであろう。マルクスは、彼が『資本論』で個人労働に基づく財産を収奪する資本蓄積の「歴史的宿命」をはっきり西ヨーロッパに限ったことを指摘している。ロシア農民の手にある土地は決して彼らの私的所有ではなかったのであるから、そうした発展の順路をそれに適用することはできない。むしろ人びとはただ多数の村落を結ぶヴォロストなる政府機関を、「コミューン自体によって選ばれ、彼らの利益の経済的

および行政的機関として役立つべき農民集会」に代えることが必要であった。これによって分割地労働から完全な協同労働への移行が容易に成しとげられたであろうとし、そのさいマルクスはとくに、農民がアルテル（次章、二〇六頁参照）の協同組合的労働契約をよく知っていたことを有効な契機として強調している。村落共同体がその重荷から解放され、その地域を拡大して正常な状態におかれるやいなや、このような過程にたいし必然的な経済的要求が起ったであろう。そしてこれに要する物質的条件はどうかといえば、かくも長い間農民を犠牲にして生活してきたロシアの社会こそはこの移行に要する前金を農民に支払う義務がある。ここでは一定の関係の下で遂行することの可能な転換が考えられていることは明白である。しかし他方では、ロシア村落共同体を無力なものとし、すべての歴史的創意を不可能にするある特殊性をマルクスは力説している。ロシア村落共同体の特殊性とはその孤立のことである。それは「局地化されたミクロコスモス」であって、一コミューンの生活と他のすべてのコミューンの生活との間になんらのつながりも成立していない。いいかえれば、マルクスがその概念を用いてはいないが存在しないことを嘆いているのは、連合化への傾向である。彼のいうところではこの特殊性はこのタイプの共同体の特徴としていたるところに見出されるのではないが、しかし「この特殊性が存在するところではどこでも、それはコミューンの上に多かれ少なかれ集権化された専制主義を招来した。」ロシア村落共同体の孤立は一般的蜂起のさ中でのみ断ち切られることが

できる。その現状は（マルクスが論究していない理由で）経済的に不安定である。「ロシアのコミューンを救出するためにはロシアの革命が必要である。」しかも革命は適当な時機にやって来なければならないし、また「村落共同体の自由な躍進を確保するためにその全力を集中しなければならない。」そのあかつきには、村落共同体はやがて「ロシア社会再生の要素として、また資本主義体制に抑圧された国々にたいする優越の要素として」発展するのであろう。

マルクスがヴェラ・ザスリッチにおくった短い書簡では、『資本論』でこの問題にふれた個所への参照についてただ一つ、次のような文章が書かれている。「それですから、『資本論』に示された分析は、村落共同体の生命力にたいする賛否のいずれにもいかなる論拠をも与えていません。しかし私がそれについてオリジナルな資料に材料を求めて行った特別の研究は、このコミューンこそはロシアにおける社会的再生の拠点であることを私に確信させました。しかしそれがそのようなものとして作用することができるためには、まず初めに四方八方からそれを圧迫している有害な影響を除去し、そうしたあとでそれに自発的な発展の正常な条件を確保してやらなければならないでしょう。」

ここでは立論の根拠が非常に圧縮されているので、わずかに知らされている解答もその真意をほとんどとらえることができない。このような圧縮はおそらくさけられなかったことが立証されるであろう。草稿では賛否が、外見上はとにかく、実際には両立しえないものとして対置

されていたからである。マルクスは、革命前におけるコミューンの望ましい方向への発展の可能なことを「理論的には」肯定したが、実際にはその「救出」を時機をえた革命の到来に依存せしめた。ここでも、他の個所におけると同様に、明らかに政治的契機、すなわち建設的な活動によって革命の勢いがその力を奪われはしないかという懸念が決定的である。マルクスにおいてはこの政治的契機に、社会の構造的更新の意義にたいする洞察が対置されていなかったので、結局肯定否定は、ヴェラ・ザスリッチにとっては彼女の決定的問題にたいする解答とはほとんど思われなかったところの文章によって補われなければならなかった。マルクスは、テンニースが語っているように、存命中すでに一つの神託、しかもその解答が多義的であるためにしばしばうかがいをたてても無駄な神託であった。ともかくもヴェラ・ザスリッチは、革命的社会主義者はコミューンの解放と発展に全力をささげるべきかどうかという彼女の質問にたいしては、彼女にとって最高の権威であったマルクスの解答から、いかなる肯定をもききだせなかった。それからほどなくして彼女は（一八八四年出版のエンゲルス『空想より科学への社会主義の発展』のロシア語版の序文で）村落共同体について若干書いたが、それはマルクスの神託から次の結論を引きだしている。すなわち共同体所有の漸次的解体は不可避であり、ロシアの近い将来は資本主義のものであるが、しかし西ヨーロッパにおける社会主義革命は東ヨーロッパでもまた資本主義を消滅せしめるであろうし、「そしてそのときには共同体所有制度の残存

物がロシアに大いに役立つことを証明するであろう。」一八八二年、同じヴェラ・ザスリッチの手に成る『共産党宣言』ロシア語版の序文でエンゲルスは、「たしかにもはや素朴な土地共有のきわめて腐敗した形態でしかない」ロシアの村落共同体が、直接より高い共産主義的所有の形態に移行しうるか、それとも西ヨーロッパの歴史的発展から知られる解体の過程を先にくぐりぬけなければならないかという――明らかにマルクスの影響の下にたてられた――問題にたいし、多少異なる解答を与えている。それは（ここでも例によってマルクスよりも一義的でまたどっしりしているが、マルクスほど問題の奥底を考察していない）次のようである。「ロシア革命が西ヨーロッパにおける労働者革命への合図となり、かくして両者がたがいに補いあうときには、今日のロシアの共有制は共産主義発展の出発点として役立つことができる。」その後エンゲルスはもっと懐疑的になったように見えるが、彼は（グスターフ・マイヤーが語るところによれば）「農民をより多く信頼したロシアの社会主義者と、工業プロレタリアートの発生により多く信頼をよせたロシア社会主義者との間の内部闘争にまきこまれる」ことをさけた。

マルクスが説明するパリ・コミューンの綱領とプルードンの連合主義との類似を正しく指摘したエドゥアルト・ベルンシュタインに反対してレーニンは、マルクスは中央集権主義者であって『フランスの内乱』における彼の論述には「中央集権主義からのいかなる逸脱も存在しない」と強く断言した。この見解はこのような一般的な形では支持されがたい。「そのときなお中央集

権化のために残る」わずかな機能は、コミューンの役員の手に移されるであろうとマルクスがいうとき、その意味は明白である。すなわちできるだけ多くの国家機能が地方分散化され、集中化されたままで残らなくてはならない機能も管理的なものに変り、しかもそれが不定の期間継続する革命後の発展の後ではなく、革命行動のさ中において行われ、かくして、エンゲルスの有名なエルフルト綱領批判によれば、「一七九二年から一七九八年にかけてフランスのあらゆる県、あらゆる市町村が有した」ところのもの、すなわち「完全な自治」を実現するというのである。それにもかかわらずレーニンはまちがってはいない。マルクスが根本においてはつねに中央集権主義者であったことにかわりないからである。マルクスにとってコミューンは本質上政治的単位であり、革命闘争の機関なのである。プロレタリアートが完全に自由にみずからをコミューンに組織し、これらコミューンの活動を資本にたいする共同戦線に……結集するとき、それは……プロレタリアートによって達成された中央集権主義ではなかろうか」とレーニンは問うている。たしかにそのとおりであり、またその限りではベルンシュタインではなくてレーニンがマルクスの忠実な解説者である。しかしそれは革命行動そのものだけに、すなわちコミューンについてマルクスが説明している意味では、数世代にわたる「発展」ではなく、首尾一貫した歴史的行為、すなわち資本主義をうちこわし、生産手段の処理をプロレタリアートの手にゆだねるところのかの行為だけにあてはまることである。しかるにフランスのコミュ

ーン綱領では「地域的自治政府」をもつ個々のコミューンは決してたんに革命の大きな装置の一つ一つの歯車ではなく、あるいはもっと機械的でない言い方をすれば、たんに革命に向って全努力を傾ける国民的身体の一つ一つの筋肉ではない。むしろ各コミューンは、独立かつ可能な最大限の自治を有する単位として変革後も存続するように定められている。行動の最中にはコミューンの個々の意志は全体の大きな推進力のうちに自発的に消えていたにしても、いまやそれは本来の決定および活動の領域を確保し、しかも真に生きた機能は「下で」、一般的な管理機能は「上で」遂行されなければならない。個々のコミューンは原則的には革命のさ中においてすでに固有の権利と権力とを与えられるが、その権利および権力は共同行動の完遂後はじめて現実のものとなる。マルクスはコミューン思想の、このような引きはなすことのできない要素を彼自身の中央集権主義に対決し、両者の間に決定をくだすことなしに、それをとりいれたのである。そこに出現する深刻な問題を彼がおそらく見てとらなかったのは、その政治的見地の優位によるものであり、マルクスにとっては、革命とその準備および活動が問題であるところではどこでも、この政治的見地の優位が固執されたのである。公的生活に関する三つの思考様式、すなわち経済的、社会的および政治的思考様式のうち、マルクスは第一のものは方法的熟達をもって駆使し、第三のものには熱情的に没頭したが、社会的思考には――マルクス主義者の耳にはまったくばかげたことに聞えるかも知れないが――稀にしか親しまなかったしまた

決して彼にとって決定的なものとはならなかったのである。

マルクスもエンゲルスも、実際には決定的な問題である構造的更新の諸要素についての問題にたいして、いち度として積極的な解答を与えなかった。彼らは構造的更新の理念になんら内面的な関係をもたなかったからである。なるほどマルクスはときには、「崩壊しつつあるブルジョア社会の胎内にすでに発達しており」、革命はただそれを「解放」すればよい「新しい社会の諸要素」に言及してはいる。しかし彼はそれらの要素を育成し、促進し、援助することに意を決しえなかったのである。革命の政治的活動こそは依然本質的にただ一つの努力すべき事柄であり、革命の政治的準備――はじめは直接の後には議会および労働組合での準備――がただ一つの本質的課題であり、それとともに政治的原理が最高の決定的原理となった。そして現に形成されつつある、もしくは新たに形成すべき構造的更新の諸要素にたいする実践的態度について具体的な決定を行う場合、それはただ時々の政治的効果の見地から行われた。かくして当然に積極的態度のための決断をくだすことには熱意を欠きかつ不統一であり、したがって効果もなく、結局そうした決断はいつも消極的な態度によってうち消されたのである。

協同組合にたいするエンゲルスの態度は、運動の精神的指導が社会再構成にとって最も重要な社会構成体の問題をとりあつかうさいの純粋に政治的な仕方の特質的な一例を示している。一八六九年にエンゲルスは（ウィルヘルム・リープクネヒトによる『ドイツ農民戦争』新版の

序文で）こう明言した。「農業の日雇労働者は、何よりも彼らの主要労働対象たる土地そのものが社会的所有に変えられ、農業労働者の協同組合によって共同の利益のために耕作される場合にのみ、彼らの貧困から救い出されるであろう。」エンゲルスが一八八五年リープクネヒトにあて、ドイツ帝国議会の社会民主派は政府にたいし次のように要求すべきであると書きおくったとき、彼はさきの原則的要請から実践的な結論を引き出したように見える。「プロシャの国土を日雇い賃労働なしには生活できない小作人や農民の代りに労働者の協同組合に貸与し、公共事業を資本家の代りに労働者協同組合に請負わせるという保証をわれわれに与えよ。それが与えられるなら、あとのことはわれわれがやるし、与えられないなら、何もしないだけだ。」こうしたことはすべて、とエンゲルスはつけ加えている、今日明日に着手され一年のうちには軌道にのせることのできる事柄であるのに、ただブルジョアジーと政府がそれを妨げているのである。これこそは勝ちとるべき真の要求とされたように思える。ところが一八八六年にエンゲルスはベーベルにたいし、その党派が、まさにこのように社会主義的な、資本主義的生産の覆滅に導くべき方策、しかも実際にはあらゆるブルジョア政府と同じく当時の政府に不可能な方策を提案することを求めた。ここにこの要求の戦術的宣伝的性格がばくろされている。すなわち協合組合の原理がたんに利用されているだけであって、努力し勝ちとるべきものとして真剣に唱えられているのではない。戦術的利用であるにしても、原則的な事柄がただ大きくかつ

はっきりと十分に表現されているならば、さして悪いことではないであろう。だがこの場合はまさしくそうではない。私は、たとえ近視眼的であったにせよ、政府の補助によって協同組合を実現しようとするラッサールの確信の方を、より社会主義的な態度と見なさざるをえない。精神的指導者が構造的更新の諸要素にたいして一定の原則を欠くことが、いかにその意に反して運動の不毛性となるかを示す一例として、私は、マルクス主義によって最も訓練されたものと一般に見られた政党たるドイツ社会民主党が、協同組合にたいする関係について行った決議の特質的な経過をあげよう。一八七五年のゴータ合同綱領（この草案にたいしてマルクスは例の疑念を表明した）では、全労働の社会主義的組織が成立すべき範囲にわたって工業および農業に、生産協同組合を設立することが要求された。これは構造的更新の明らかな承認であり、そうすることがラッサール派との連繋に不可欠と考えられたのである。一八九一年のエルフルト綱領では、もはやこれについて何もきかれないが、このことは、この間に設立された労働者協同組合および生産協同組合の失敗だけによって説明せらるべきでなく、むしろ主として原則的方針の欠如によって説明せらるべきである。そして一八九二年ベルリンでの党大会では、党は「政治闘争や労働組合闘争において処分された同志たちの社会生活を可能にすることを目的とするか、あるいは運動の助長に役立つ場合にのみ、協同組合の設立を承認し」うること、それ以外の場合には「党員は協同組合の設立に反対すべきこと」が決議された。これは全く気も清

々するほどはっきりしている。ところが一八九九年ハノーヴァー大会の決議では、党は、経済的協同組合の設立に関しては中立であること、かくの如き協同組合の設立に、労働者階級をその仕事の自主的指導に向って教育するための適切な手段を認めること、しかし「賃銀奴隷の鎖からの解放のためのいかなる決定的意義をも」協同組合に与えないことが述べられた。しかるに一九一〇年マグデブルクでは、消費協同組合が階級闘争を支える有効な手段として認められたばかりでなく、さらに協同組合運動一般が「労働者階級の地位向上のための政治闘争および労働組合闘争にとって効果的な補足」であると言明された。

対象としてもまた地理的にも限られてはいるが重要な分野におけるこのようにジグザグな行程は、社会主義運動の悲劇的な誤れる発展のシンボルと見てもよいであろう。社会主義運動は大規模な宣伝や指令の力をもってその周囲にプロレタリアートを集め、政治および経済の領域において攻撃と防衛に大きな闘争力を発揮した。しかし社会主義が究極的にはそのために宣伝し計画し闘ったところのもの、すなわち新しい社会形態の生成は、その意識の本当の対象でもなければ、その活動の本当の目標でもなかった。マルクスがパリ・コミューンを賞揚していったことをマルクス主義運動は望みもしなければ実行もしなかった。マルクス主義運動は、新しい社会の現存する前提的形態に留意しなかったし、新たに生起しあるいは形成されようとしている企てを支援し、それに影響を加え、それを指導し、整理し、その連合を結成することには

熱心に努力しなかった。それは生きた共同社会の一つ一つの細胞、一つ一つの細胞結合を生み出すことにみずから一貫した働きをなさなかった。マルクス主義運動は、その強大な勢力にもかかわらず、革命によって解放せらるべき人間の新しい社会的存在を形成することに着手していないのである。